言葉から見た日本問題

小　金　芳　弘

はじめに――「平常」か「症状」か

平成3年6月に発覚した野村証券と日興証券の損失補塡と暴力団融資に端を発した「不祥事」の原因は何か？　野村が悪いのか，「株屋」全部が悪いのか，それを黙認した大蔵省が悪いのか，補塡を要求ないし受け入れた大企業や団体が悪いのか。もしこれら全部が悪いとすると，その前のリクルート事件やロッキード事件までを考慮に入れれば，現代日本の経済と政治の倫理は殆んど救いようのないほど汚染されていることになる。もしそうなら，そのような日本経済の業績が良く共産主義国の経済が破綻したのは何故か？

この疑問に対する答えとしては，資本主義経済と民主主義政治は，その「生理現象」としてこのような汚染を発生させる性質を持っているのだ，と言うことが可能である。しかし，同じ資本主義と民主主義の国である欧米ではそれを処理するための仕組みが早くから発達しているのに，彼らと並ぶ経済大国となった日本では，中々そうならない。もしこれが，日本の資本主義と民主主義が欧米のものと違っているためであるなら，欧米が中心となって構成する国際社会がその異質性を口実として日本を排除しようとしても，文句を言うことはできないだろう。

しかし，これは人間社会ならどこにでも存在し得るある条件が日本に存在することによって起こる一種の「症状」であり，たまたま欧米にはそれが存在しないだけのことだ，ということが立証できれば，日本が欧米と基本的に異質だという説が否定されるだけでなく，症状の再発を防ぐための根本的な治療方法を見つけることも可能になるであろう。

そうしようとする者にとって第一に必要なことは，現代の日本社会に存在するこのような特殊な条件を識別し，それが症状に繋がる過程を「病理学的」に説明することである。日本人による「日本人論」の多くは，日本社会に存在する特殊な条件を日本の業績と結びつけようとしてきた。もしそれがうまく行けば，生理学の理論と知識が病理学にも役に立つように，これは「症状」の原因の解明にも使えるはずである。

しかし今までのところ，これは成功していない。それは，理論的な一貫性を維持しようと

して「良いから良い」式の循環論法になるか，同じ条件が成功だけでなく症状に繋がる場合もあることを見逃すか，になりやすいからである。西欧の日本研究者はこれに比べればより「論理的」である代わりに，他の者には「成功」と見えるものまで「症状」に含めたり[1]，「日本的矛盾」を説明できなかったり[2]，する場合が多い。

もう一つの問題は，日本に特有な条件を識別する段階で発生する。それは，日本に特有と考えられる条件は大抵はそれと全く逆のものと共存しているのに，「コインの裏側」を見逃しやすいことである。たとえば，社会学的な「タテ型構造」を日本の特有条件とする分析[3]では，それが全く成立し得ない場合とどう結びつけるのか，心理学的な「甘え」の存在を特有条件にする分析[4]では，それが全く許されない過酷な状況が頻繁に発生することをどう説明するのか，というような問題が，無視ないし軽視されやすいのである。これらが特殊日本的であると主張するためには，その逆の現象も特殊日本的であって，しかも両者は相殺されるのでなく相乗効果を以て特異性を増幅する，ということを論証する必要があるだろう。

ここでは，日本人の言葉に対する二つの相反する特殊な態度と，その相互作用が日本の「症状」と「成功」にどう結びついているかを，検討することとしたい。

1　証券不祥事の社会病理学的考察

証券不祥事は，最も新しい症状であるばかりでなく，発生の態様も（予想される）収拾の仕方も欧米における不祥事とは性質を異にする典型的な「日本問題」[5]であり，日本人の言葉に対する特殊な態度が露出している点で，症例としてはこれ一つで十分だと思われる。

(1)　正当化の道徳的根拠

今回の損失補塡問題を見ると，これを正当化する論理は十分に成立しているのに対して，それを非難する世論は単に「規則違反」を責めるだけである点で，極めて特殊日本的な現象だと言うことができる。

商人のミスないし見込み違いによって顧客に損をさせた時その穴埋めをすることは，日本の伝統である「商人道」から見れば，不道徳どころか称賛されるべき行為である。また，一般大衆は放っておいて大口顧客だけを優遇するのはけしからんという言い分は，金持ちだけが得する「不公平」は許せないというものと同じであり，その帰結である共産主義イデオロギーは既に破産してしまっている。

特定の顧客にだけ損失補塡をすることが悪くないとしたら，それを約束することも悪いとは言えないだろう。「民主的」な選挙においても，良い政治を公約することと「利益誘導」を区別することは難しいからだ。未上場株の割当やインサイダー情報の提供についても，利益を与えることが利益になると思われる相手に対してそうすることを是認する資本主義体制

下では，間違いだとは言えないであろう。証券会社，大口顧客，監督官庁のすべてがこの規則違反に「参加」していたということは，それは「悪」ではないとする論理が成立し得たからであって，彼らに道徳心がなかったからではない。

現代の資本主義がこれらの行為を厳重に規制するのは，究極の目標が変わったためではない。昔とは比較にならないほど多数のしかも多様な参加者が巨額の取引を行うようになったために，各自の行動の根拠が第三者にも明確に判るようでないと公平なゲームができない状態になったからである。仲間内でやる丁半博打と国際ブリッジ・トーナメントとではルールだけでなく要請されるマナーもまるで違うように，ゲームが違えば，「善悪」の基準ないし「価値」も違ってくる。

問題は，日本人は遊びに関しては価値の変化によく対応できるのに，本業においてはそうでないことである。その主な原因は，重要なゲームにおける価値を，人間ならば「何時でも何処でも同じように」守るべき道徳と同じだと考えることであろう。社会の変化に応じて政治や経済を管理する規則を変えねばならなくなった時，西欧人は，新しい規則を受け入れると同時にその裏付けになっている価値を受け入れ，古い価値を捨てる。しかし，古くても価値はそれ自体で「善」だと思っている日本人は，新しい規則に体化された価値と相入れない価値も捨てない。前例で言えば，現代の資本市場において，新しい価値と一緒に江戸時代の商人道徳的な価値も守ろうとし，他人にもそれを要求するのである。

(2) 日本的集団の暴走と破局

この状況下では，人間は，規則が予想していない価値にまで縛られて行動の自由を失うか，自分に都合の好い価値だけを組み合わせることによって規則を好きなようにねじ曲げるか，どちらかしかない。余程の道徳家でない限り後者を選ぶのが普通だろうが，皆がそうすれば，道徳はあってなきがごとき状態になる。そこで日本人は，決まった規則には問答無用で従うことが道徳だと考えることによって，社会秩序を維持している。日本人が細かい規則やエチケットを非常によく守るのはそのためだが，このような「遵法精神」だけでは，規則と価値が大きく変わろうとしている時に正しい方向を見つけることはできない。

現代の日本人が直接間接にその生活を依存している企業は，それぞれの利潤を追求するために詳細で厳密な規則を持っているし，政党・派閥・労働組合・業界団体なども，権力や威信を追求し必要な金を獲得するために厳しい内部規則を持っている。趣味や親睦などのための緩やかな結びつきによるものを除けば，宗教・芸術・教育・医療などの「善」を目的とする集団も事情は同じである。「国家」の規則である法令の多くは，これらの「ハードな」集団の規則にくらべればひどく抽象的で大まかであり，しかも，国家自体がいくつにも割れてこれらと同質な集団を形成している。最大の問題は，社会が大きく変わる時には大抵の規則

は「時代遅れ」になってしまうということである。

現代のように変化の激しい時代に何か積極的なことをしようとすれば，すべての規則を守ることなどは到底不可能であり，結局は各人の持つ価値に頼らなければならないが，前述したように日本人の中には矛盾した価値が共存しているので，その使い分けによってどんな「規則破り」も道徳的に正当化できる。強力な集団に所属する者がその力を背景にしてこれを始めると，誰も止めることはできない。そのために被害を受ける者の抗議は，その尻馬に乗ろうとする者が押さえつけてしまうし，そんな無法は何時までも続かないと考えてこれを止めようとする者がいたら，それを放逐したり「棚上げ」したりすることができるからである。かつて日本軍が暴走を始めた時，昭和天皇はそれを阻止する権限を行使することができず，反対しようとした軍人は退役させられ，政治家は逮捕された。

日本的集団の暴走は，軍隊の場合は敗戦，証券会社の場合はバブルの破裂，というような破局によって終息する。これは，戦略・戦術の失敗による経営破綻とは違うし，指導者がヒトラーのように途方もなく大きい邪悪な野心を抱いたためでもなく，せいぜい勢いに「悪乗り」した程度の結果に過ぎないが，破局の損害は大きいので形式的にはその責任を取る者が必要である。このため，それまで暴走を正当化していた価値が唐突に否定され，それに照らして誰かが責任を取らされる。

この時，古い価値が「何故」死なねばならないかを新しい価値に照らして納得させた後で葬る，という手続きがなされないので，一旦否定されたはずの価値がほとぼりが冷めるとまた生き返ってくることが多い。軍国主義が死に絶えたように見えるのも，この前の敗戦で皆がこりたためであって，平和主義の下では軍国主義は生きられないという「論理」によるものではない。このように正反対の価値が共存している社会では，論理が「力」を制御することができないので，何時どんなことが起こるか判らない危険がある。

(3) 論理か情緒か

日本人のこのような「非論理性」は，論理的能力の欠如を意味するわけではない。科学や技術においては勿論，他の領域においても日本人は，しばしば，西欧人に劣らず論理的に思考し表現する能力を発揮しているからである。しかし，論理を使いこなす能力は大きな「力」であるだけに，論理によってそれを制御できないということは，力の「暴発」を招く危険が大きい。カレル・V・ウォルフレンによれば，日本人が力を行使する場合に論理的になれないことが，「日本問題」の源泉なのである[6]。

人間はその欲望を追求するのに，多くの場合本能や感情に従ってそれぞれの持つ力を行使しようとする。このような人間の集団を制御しながら全体としての共通の目的を追求することは，本能や感情に従っていたのでは不可能であり，知的能力によって「権力」——制御さ

れた物理的な力――を操作することが必要になる。この場合相手は一人一人が固有の意思と力を持つ人間の集団だから，モノと違って力だけで「統治」することはできず，被統治者との間にコミュニケーションを成立させなければならない。問題は，どのようにしてそれを行うかである。

日本人の伝統的な考え方は，統治される者の感情を理解しその「心」に訴えることなしには有効な統治はできない，というものである。そしてこれらは，統治者の能力というよりはむしろその人格によって可能になるものだから，日本の政治家は何よりも「情の人」であることを要求され，それは広く指導者すべての資格条件となっている。これに対して西欧人は，人間とは命令に従うことが正しいとか得だとかいうことを論理的に理解して初めて言うことを聞くものだと考えるので，「頭」に訴えることを重視する。情緒に訴えるのには殆んど言葉は要らないが，論理的に理解させるには言葉に頼るしかない。「仁」を基本とする中国の統治原理は日本のそれと同じだが，それを「言葉」で明らかに表現することによって秩序を作りだした点では，中国は西欧と同じである。

言葉を重視する西欧社会は，それを悪用する者に対しては厳しい制裁を課するのが普通である。その典型は嘘や誤魔化しに対するものであって，偽証の罪は重いし，自分の意見をあいまいにする者は誰からも信用されない。しかし日本では，一般的に言葉は余り信用されず，重要なコミュニケーションはなるべく言葉を使わないで「以心伝心」される。嘘に対する制裁は概して甘い。統治者・指導者の言葉は，無条件に信用され実現されることが理想であり，彼らが嘘を言っていないとか論理的に間違っていないとかを立証しようとすれば，却ってその正統性に疑問を持たれてしまう。

証券市場の損失補填や株価操作がここまでエスカレートしたのも，政府がそれを禁ずる通達や法令を出しただけで後は何もしなかったからである。それだけで巨大な資本市場が言うことを聞くと考えることは幻想に過ぎないが，前述のような統治原理に従えばこうなるしかない。しかしそのツケは，やがて関係者全員に廻ることになる。

2　言霊（ことだま）症候群――その原因と症状

論理は，「命題」（テーゼ）と「反対命題」（アンチテーゼ），「条件」と「結果」，「真」と「偽」，「肯定」と「否定」，等を区別し，「真」の「否定」を「偽」とするような，普遍抽象的な思考と表現のための決まりである。印欧語や中国語を話したり書いたりするための決まりである文法は，このような論理に従ってできている。しかし日本語はそうではなく，各種の事柄を単に羅列して行くだけだから，論理を操作するための道具としては甚だ非能率である。そこで日本人は，古代中国語を日本語読みにした「漢文」という特別の日本語を作りだ

し，それによって長い間この仕事を行ってきた。

西欧人もかつては，この種の仕事をするために古代ギリシャ語とラテン語に頼らなければならなかったが，彼らは，必要な場合にはそれを「外国語」としてそのまま使う一方，自国語の中にそれを次第に取り込んで行った。しかし，中国語から漢文という自国語を作りだした日本人は，それを「書く」ためだけの文語体として用い，伝統的な言語である大和言葉（やまとことば）への浸透を遮断しつつ，後者を「話す」ための口語体とした。同じ日本語なのに文語体と口語体とでは単語も文法も全然違うという現象の原因はここにある。戦後は，文語体という形式は消滅したが，日本人が論理的に話そうとすると途端に文語体的な言葉になることは，昔から変わっていない。

(1)「言霊」と「言挙げ（ことあげ）」

古来，日本は言霊（ことだま）の「さきはう」（栄える）国だと言われてきた。戦前は言霊は中国や西洋からの借用語ではない純粋な日本の言語である大和言葉に宿る「霊」であり，日本語に優れた独自性があるのはこのためである，とされていた[7]。しかしこれでは，そのような霊的能力を持つ言葉が国家統治のために使われず，天皇の国民に対する言葉である法令や勅語がすべて文語体（明治以前は漢文）で書かれていたことを説明できない。近年はそれに代わって，言霊の実体についてのより説得的な解明が進んでいる。

ピーター・N・デールによれば，言霊は「こと」（事実）と「ことば」（言語）を結びつける精霊であり，「かたる」という日本語の音が「こと」に似ているため，「こと」と「ことば」が混同されたことから生まれた[8]。井沢元彦によれば，これは，ある言葉を唱えることによってその内容が実現するという「考え方」である[9]。何れにせよ古代の日本人は，語られたことを実現する力を持つ精霊が到るところに存在する（さきはう）と信じていた。「話す」という意味の大和言葉は「言挙げ（ことあげ）する」であり，これは，「物を持ち上げる」（事を実行する）という言葉と同義である。

自然現象を原因と結果に分けて理解することを知らなかった古代の日本人は，世の中に起こることをそのまま受け取るしかなかったし，自分達の話の内容も大抵は現実のできごとに関するものだったろうから，両者を混同してしまったとしてもおかしくはない。また話されたことが実際に起こることはしばしば経験されるから，神がそうさせると信じることは，アニミズムの世界での因果論としては，的外れではない。キリスト教でも言葉（ロゴス）は神だからである。問題は，日本人が更に進んで色々な推論を行うようになった時，この考えに囚われていたために数々の論理的な誤りを冒したことである。

話されたことを実現する力を持つ精霊がいるのなら，「望ましいことが起こり」「望ましくないことが起こらない」ようにする方法は，望ましいことを話し望ましくないことを話さな

いことである。しかし，皆が自分にとって望ましいことを自由に話し始めたら色々なことが起こって収拾が着かなくなるので，普通の人間にはごく日常的なことや技術的なことしか話さないように，「言挙げせず」という規制ができたと考えられる。一方，自由にものを話せるということは自由に言霊と交信できることだから，その人はシャーマン（呪術者）であり，共同体全体にとって望ましいことを話すのが仕事になる。部族社会では普通「政」は「祭」と一致していて首長はシャーマンだが，日本でも「邪馬台国」の女王はそうだった。こうなると言挙げは，望ましいことが起こり望ましくないことが起こらないよう，言霊にお願いするためのシャーマンの儀式化された「語り」になる。

(2) 言霊への恐れと論理的過誤

井沢氏は，日本人は今でも言霊を信じていると仮定しなければ説明できないように見える社会現象を，いくつも指摘している[10]。以下の三つはそのほんの一例である。

最初は，ハイジャック事件が起きた時，乗客のある程度の犠牲というリスクを含む解決法を提案することは世論の厳しい非難を浴びるのでできない，ということである。次は，身体障害の状況を示すような言葉は勿論，単なる比喩としての「片手落ち」というような言葉まで，それを使えば激しく非難されるので使えない，ということである。最後は，実体的には明らかに軍隊である「自衛隊」を，そう呼ぶことができないことである。

井沢氏は，これらの言葉の禁止は，言霊がそれを聞いて「望ましくないこと」――乗客の死傷，身体障害，（軍隊が戦争の原因であるとして）戦争，等――を実現するのを恐れるからだ，と解釈する。これらは，他人を不愉快にさせないようにするための儀礼的配慮としては常軌を逸しているから，言霊への恐れと無関係ではあり得ないだろう。しかし，言霊自体を殆ど知らない今の日本人が，それを理由に言論を抑圧しているとは思えない。これは，単に昔からそうなっているというだけで正当化されているのである。ただ，素朴な言霊への恐れが徹底的な言論規制に変質した時には，それなりの根拠があったはずである。そしてそれは恐らく，今から見れば大変な誤解にもとづくものである。

出発点は，「話されたこと」は言霊の力で「実際に起こる」という命題である。それが正しいとして，「起こることは話されたことだ」という「逆」が正しいかというと，話されなかったこともいくらでも起こり得るのだから，そうではない。しかし「逆は必ずしも真でない」という論理学を知らなかった昔の日本人は，それを正しいと信じた。しかも当時は，過去も現在も未来も区別できない人が多く，その結果生まれた重大な誤解は，現代まで残る二つの問題に繋がったと推定される。

第一は，人質の死傷や差別や戦争に関係する言葉を口にする者は，それが起こった時にはその「犯人」と同じように追求される，ということである。それは，これらのことが起こる

ということは誰かがそれを話しているということを意味し，両者の間には，事実とその「実行者」との間におけると同じ程度に密接な関係があると見なされるからである。第二は，過去に起こった望ましくないことを話しても同じように追求されることである。昔起こった過ちを今論ずることは，それを引き起こした者と同じ責任を負うことを意味する。

このように，現代の日本にナンセンスとしか言えないような言論規制が存在していることに関して井沢氏が提起した疑問とその論理的な解答を追って行くと，多分千年以上も前に日本人が犯した誤解の死骸らしいものにつき当たった。しかしそれが本当の原因だと言うためには，別の面から日本人の言論に対する態度を調べてみる必要がある。

(3) 言霊を恐れていない時の日本人

日本人は，「望ましくないこと」を話すことによって実行者と同じ責任を引き受けさせられる恐れがあるので言葉に対する態度が神経質になる，というのがこれまでに得られた命題である。それが正しいことを立証するには，その「対偶」が正しいことを証明すれば良い。これは，日本人の言葉に対する態度が神経質でないのは，話しただけでは事実に対する責任を負わされる危険がないからだ，というものである。日本人が気楽にものを話したり書いたりする場合は四つある。

第一は，上は天皇から下は有楽町ガード下のお姐さんに至るまで何の気兼ねもなく話したいことを話していた，敗戦直後の数年間のような場合である。この時は日本中に望ましくないことが充満していたが，占領軍は，その責任は戦争を「実行」した者とそれを「煽動」した者にあるとして戦犯を追求していた。だから，そうでない者は，何を話してもそれだけで責任を追求される危険は——軍国主義を叫ぶことを除けば——なかったのである。

第二は「他人ごと」について語る場合である。この時の日本人は安心して言いたい放題のことを言うが，それは，相手にどんなことが起ころうが所属集団の中では誰も気にしないからである。ただ，身内と他人を分ける基準は時と場合によって異なるから，前の場合よりは慎重さを必要とする。たとえばライバル会社は，違う会社だという点では他人だが同じ業界に属するという点では身内である。外国人は，かつてはいかなる基準によっても他人だったが，国際化が進むにつれてそうは言えなくなってきている。

第三は，現実と全く関係のない普遍的抽象的な思考について語る場合で，この時の日本人は非常に「自由」に発想し発言するが，これは，それが現実に影響を与えない「空理空論」であることがハッキリしているからであり，一旦そうでないことになると事態は一変する。昭和初期の日本の学界・論壇はマルクス主義者の天下だったが，彼らが軍隊にとって邪魔な存在になってくると，それを根こそぎするような大弾圧が襲った。

第四は，社会的には全く重要でない私的な事柄を語る場合であって，この時の日本人の気

楽な態度は，その結果何が起こっても社会に影響するとは誰も思わないことから生まれる。その一つの産物は，恋愛や日常些事の精密な描写をこととする文学的伝統である。

以上から，日本人の言葉に対する責任はあくまでも「現実」との関連において捉えられるのであり，事実に反することを話したり論理的に矛盾することを話しても，それだけでは責められる恐れはない，ということが言える。一般人がそうであるだけでなく，ものを考えかつ発表することを職務とする「知識人」もそうである。西欧では彼らは，その言葉が望ましくない事件の前兆になる恐れがあるなどと言われることはない代わりに，論理や事実に関する正確性に関しては仲間から厳しいチエックを受け，問題ありとされたら社会から相手にされなくなる。しかし日本人は，論敵との論争などでは相手の些細な過ちも許さず過酷に追求することはあるが，「同業者」の嘘や誤魔化しをそれだけで指摘し論難するようなことはしない。もしそうすれば非難されるであろう。

この種の「言論の自由」は，前述したような規制の毒に対する解毒剤のようなものであり，日本社会でそれなりの役割は果たしている。しかし，言葉を話したり書いたりする行為それ自身に対するチェックが甘いことは，言葉の世界が現実の世界に対抗するまで育つことを却って阻害していると言えよう。

3　一流の経済と三流の政治 —— その共存のメカニズム

人々の言葉に対するこのような態度が初めに述べたような日本社会の持つ特殊な条件であるとすれば，次は，それが日本社会の「成功」と「症状」にどのように結びつくのかを分析することが必要になる。そのためここでは，ダニエル・ベルの枠組みに従い，社会を，技術経済構造 techno - economic structure，政治 polity，文化 culture の三つの領域に分ける[11]。技術経済構造は生産のための手段であり，政治は「社会正義」と「力」の闘技場であり，文化は，人間存在の意義を探究して象徴的に表現しようとする，文学・芸術・宗教などの活動である。別の言い方をすれば，技術経済構造はモノおよびその代替物としてのカネを扱い，政治はヒトを扱い，文化は主体としての人間が自分自身を扱う。

(1)　技術経済構造 —— 狩猟採集からハイテクまで

一国の経済力とは結局はモノの豊富さであり，それを決定するものは今や，自然条件ではなくその国民の持つ生産技術の水準である。そして，今の日本の「切り札」になっている高い技術的能力は，日本人が自力で作り出したものではなく，歴史も文化も異なる社会で発達した技術を次々に移植してきたことの結果である。なぜそれが可能だったのかを，前述したような日本人の言葉に対する態度との関連で考えて見よう。

言葉は，狩猟採集時代の日本人が技術を習得したり向上させたりするのには，余り必要な

かったであろう。しかし，農耕や戦争に使う道具の製造技術を先進文明から学んでそれを自分で作ろうとすると，言葉が必要になった。文明人がそれを直接教えてくれるわけではないので，品物を見て，何故こうなっているのかとか，ここをこう変えればどうなるだろうかとかを，論理的に考えて話し合うためである。これは，技術進歩という「望ましいこと」のために行うのだから，「言霊」に聞かれても必配する必要はない。

日本人が，技術について論理的に考えたり話し合ったりすることを昔からやっていたかどうかは，何の記録もないので判らないが，ここでそう推定する理由は三つある。第一は，これは現代日本の技術者やQC（品質管理）のグループが何時もやっていることであり，それは殆ど土着の伝統に根ざしているように見えることである。

第二は，地理的に隔絶した先進国で発達した技術を次々に移植できることを論理的に説明するには，これ以外に方法がないことである。自然の過程を経ず人間の手だけで作られる製品の中には，高度のものになればなるほど人間の「思考」が大量にインプットされているから，作り方を直接教えてもらわないで同じものを作ろうとすれば，先ずこの技術の「真髄」を知らなければならない。余所で作られたものを分解してそこにコード化されている論理を解読し，それにもとづいて同じものを再構成することは，現代ではリバース・エンジニアリングと呼ばれている。日本人は，この「沈黙の言語」を理解し操作することを，技術の移植を通じて身に着けてきた，というわけである。

第三は，技術が科学という論理と結びつき自分自身も言葉を持つテクノロジーとなった西欧近代技術の移植において，日本が過去にも他の非西欧諸国にも比類のないほどの高能率を発揮したことである。日本人が技術の論理を使いこなす能力を元々持っていたとすれば，相手が西欧語や数学その他の科学用語で語ることが判れば，その言葉を学ぶことによって解読ははるかに容易になるばかりか，相手の進もうとする方向を知ることも，先回りすることさえも可能になる。日本が西欧の労働集約的技術から学び始めて資本集約的技術で追いつき，知識集約的なハイテクになると瞬く間にそれを追い抜き始めたことは，そう仮定しなければ説明できない。

しかし，これほどの力を持つ日本の技術にも泣きどころはある。それは，モノに体化できないアイディアやサービスのような技術が，画一的な技術の進歩にくらべて立ち遅れることである。ハードウェアよりソフトウェアが弱く，ソフトウェアの中でもゲームやワープロは強いが，ソフトを作るためのソフトであるAI（人工知能）は弱い。この結果，従来のパラダイムを一新させるような革命的な技術を生み出すことが難しく，これが経済摩擦に輪をかけることになる。なぜそうなるかというと，ここまでくると必要な言葉は技術の領域を越えて，日本人の苦手な領分に入ってしまうからである。

(2) 政治――「鎮守の森」からの統治

文化地理学者で日本研究者であるA・ベルクの分析を利用すると，日本の統治原理をその社会資本の物的構造によって説明することができる。彼によれば，西欧の都市では王宮・教会その他の記念建造物 monument が到るところに聳え立ち，それをポイントにして道路網が四通八達していて，最大の記念建造物である「中心」に容易に到達できるが，日本の都市には記念建造物らしいものは殆どないし，東京では，その「中心」たるべき皇居がどこからも見えない。神社仏閣は，人目につかないところにひっそりとたたずんでおり，神社の本体は，「鎮守の森」によって人々の目から隠されている[12]。

ここで，記念建造物が人々を統合するための共通の「価値」であり，道路がそれを人々に伝えるための「言葉」だとすると，西欧の都市の構造は，判りやすい言葉を通じて人々を服従させる西欧の統治原理を表していると言える。これに反して日本の都市の構造は，価値がどんなものなのか，どうすればそれが実現できるのかを「判らせない」ことによって人々を統合する，日本の統治原理を表していると言える。日本人は，伊勢の皇大神宮を「何事のおわしますかを知らない」ので尊いと感じるから，それが可能なのである[13]。しかし，もしそうだとしても，統治者の言葉が判りにくい方が判りやすい場合よりも統治しやすいということはあり得ない。

日本の政治組織では，「頭」に訴えるための道具立てが不足なので，「心」に訴えるための道具立てが発達しているのである。これは，権力の源泉を人目から隠して神秘化すると共に，実際に権力を行使する者が「権威」と「人間」の間に入って「仲人」の役割を果たすことから成り立っている。この場合，普通の政治家は後者になるしかないので，その言葉は「神意」を伝えるための「言挙げ」となり，政府文書や審議会の「答申」も，同じような言葉になる。これは，昔ならば漢文ないし文語体であり，現在でも，専門語，翻訳語，片仮名などをふんだんに使って日常語からかけ離れる傾向が強い。

しかも多くの場合これは，彼ら自身ではなく「鎮守の森」に隠れている人達（主として官僚）が，日本にとって「望ましくないこと」に一言たりとも触れないように注意しつつ，日本の都市の道路のように廻りくどい論理に従い，普遍抽象的な価値を並べて起案したものである。それに反対する人達も，違う神の「お告げ」を同じように普遍抽象的な言葉で述べるか，相手の言葉から「望ましくないこと」を見つけて攻撃するだけである。

このように最終的な責任の所在も意思決定の過程も不明確な管理をしていたら，競争の激しい環境の中ではその集団は生き残れないから，激しい競争に曝される日本の集団は，これとは全く違う構造を持っている。その典型である中小企業では，社長が全権力と従って全責任を持ち，社員の一人一人を完全に掌握している。大企業でも，その中をいくつもの同じよ

うな会社や事業部に分けて競争させた方が概して業績は良いが，無統制な競争が業績を悪化させることも多い。日本社会は，このような集団が過去の経緯と現在の利益によって結びついた複合体である。

このような社会が今日まで連続性と統一性を保ってきた原因は，三つ考えられる。第一は，日本が島国であり，海という「自然の防壁」が外敵の侵入を防いだことである。第二は，内部矛盾が収拾不可能なまで累積する前に，一貫性のある思想体系が輸入されて，取り敢えずの接着剤となったことである。第三は，社会の技術経済構造が前述したようなやり方で絶えず補強され，外的脅威と内的不満に対する抵抗力となったことである。国粋主義者の主張する「神ながらの道」——論理でなく情緒に訴える伝統的統治原理——は，一切の論理を拒否して「一億一心」で戦った時の状況を考えると，役に立ったとは思われない。

(3) 文化 —— 多様な価値と板挟みの道徳

日本文化は，真・善・美などの人間にとって大事なものを，人生のそれぞれ異なった局面における「望ましいこと」として象徴的に表現しようとし，一つの中心的価値に統合しようとはしない。その点でこれは，多元的な価値を認めるギリシャ文化に近く，すべての価値を絶対神の意思に結びつけようとするキリスト教を拒否するだけでなく，宗教そのものをバラバラにして生活に取り入れてしまう。正月は初詣で，年末はクリスマス，結婚式は神道，葬式は仏教，というようなことは，日本人にとっては何でもないことである。

宗教を体系として捉える人達には矛盾の塊としか思われないであろうこの文化も，人間の自然な欲求には適っているように見える。近年その人気は世界的に高まっているし，西欧文化も，多様な価値を認めるという点では日本の後を追っているからである。ただ，多様化の許容が互に相入れない価値の両立にまで行くと，初めに証券不祥事について述べたような症状の原因となるし，実際殆どの場合にそれは起こっている。

「言霊」について述べたように，それ自身では「良いこと」である一つの価値を否定することは，その結果望ましくないことが起こった場合に，責任を追求される危険がある。いくら，もう一つの価値によればそれは否定されざるを得なかったなどと言っても，言い訳に過ぎないと見なされるから，日本人は，価値を否定するような言葉は口に出さない。しかし当事者になった場合には，行動でそれが判ってしまう。

たとえば，儒教の忠と孝は主人と親という二つの「大事なもの」を守るための最も重要な道徳的義務だが，この二人が戦いを始めたら，その両方を果たすことはできない。この場合，中国人なら迷わずにその一つを捨てるだろうが，それは，二つの相入れないものがあれば一つを取るしかないことを，世論が理解してくれるからである。しかし日本人は，「忠ならんと欲すれば孝ならず……」と延々と悩まなければならない。大切な義務を捨てても良いとか，

その一方が他方より大事でないとかを口に出すことは勿論，それを両立させるべく苦闘しなかったということは，道徳的に責められる行為だからである。

それでも，普通の人間が平重盛，ハムレット，ロミオとジュリエット，のような立場に置かれることは滅多にないし，これらはすぐれて，親子兄弟，主従，男女間の愛情の相剋の問題でもある。しかし日本では，世の中が変わって古い価値と共存できない新しい価値およびそれに奉仕すべき道徳的義務がたくさん出てくると，制度の矛盾相剋の犠牲になる者が急速に増える。古い価値と義務が自然に捨てられるわけではなく，両者の対立が表面化しても世論が新しいものを支持してくれるわけではないからである。

中世までは，この板挟みの犠牲になるのは殆ど武士だけであり，それは概ね切腹や討ち死ににによって決着した。江戸時代になると，義理と人情の板挟みによる男女の心中が激増した。義理は，社会秩序を維持するための伝統的な価値に発する義務であり，人情は，新しい町人文化が認める恋愛や家族愛などの価値に伴う，これも一種の義務である。幕府が厳禁する心中を主題とする歌舞伎や文楽が得た圧倒的な人気は，後者を支持したいが公然とはそうできない人達の心情の表われだったと考えることができる[14]。

現代の典型的な板挟み現象は，職場に対する忠誠と家族「サービス」の間のものであろう。後者は新しく，前者は古い上に時代遅れの価値と義務を大量に含んでおり，技術経済的な発展に伴って新しい義務も増える結果，矛盾は職場の内部にまで広がっている。破局の形態は，過労死，ノイローゼ，離婚などと多様化している。

それを防ぐ方法の一つは，力の強い者に従うことである。家族と上役の板挟みのような場合には，大部分の日本人はこの方法を取る。もう一つは矛盾を順送りすることであり，これは主として，部下や下請けなど自分より弱い者に無理を押しつける形を取るが，強い者に押しつける——甘える——という手もあるし，お客に損をさせたり公害を垂れ流すなど，第三者に押しつける方法もある。その後で金で「損失補塡」することは，一応の解決にはなるが，そのツケはまたどこかに廻ることになる。

これらはいずれも，論理矛盾を論理でなく現実の力関係にもとづく妥協で解決しようとするものだから，それによる歪みは現実の中に蓄積されて行く。

おわりに —— 日本のペレストロイカ

「初めに言葉（ロゴス）があった。言葉は神とともにあった。言葉は神だった……すべてのものは，言葉によって作られた……このような文化は，世界が世界に先立って存在するある論理に従っていることを，当然の第一原理として提示する……同じ文化はまた，正しい証明が他のいかなるものをも必要とせず自己完結する論述としての数学をとりわけ高い地位に

おく……論理（ロゴス）とはそれ自体で完結しているのに対して，日本人の数学者たちは，当然であるかのごとく，それを経験律によって確かめようとした。日本文化では，論理も主体も，世界から独立しては自らを主張できない」[15]。

日本社会の特殊性を，西欧と殆ど違わない技術経済構造を持っているのに言葉は現実世界から独立できないことだ，と考えて見よう。前述したようにこれは，古代日本人の世界観が形を変えて残存していることに発すると見られる。このこと自体は問題ではないが，それが今でも日本の「症状」の発生原因になっているとすれば，放置しておくわけには行かない。その過程を一般化して述べると，次のようになろう。

技術の言葉（テクノロジー）が現実から独立できないことは何ら問題ではない。機械の設計が適切かどうかは，それが狙い通りに動くかどうかで判定すべきだし，ある技術を採用するかどうかは，現実の効率にもとづいて決めれば良いからである。しかし政治と経済では，権力や金を獲得し行使する行為の正当性を評価する言葉は，それから独立していなければならない。そうでないと，現実の裏付けを持つ者の言葉の方が常に強いので，自由競争の下では手段を選ばぬ権力争いやシェア争いが激化するからである。文化の領域でも同じであり，作品や学説の評価は，創作活動から独立してなされなければならない。

言葉が現実の権力，金力，名声から独立してそれに拮抗できるためには，対象についての十分な知識情報と「それ自体で完結した論理」の両方に支えられる必要がある。日本でそれがむつかしいのは，現実の知識に立脚しない抽象論で現実を評価しようとしたり，論理と現実を混同したり，相対立するものを両方とも正しいと言って見たりする者が多いからである。これは，日本人に論理的な思考と表現の能力がない，ということではない。江戸時代の日本で既に，萩生徂徠，安藤昌益，本居宣長などの人達は，社会の実態に関する知識と一貫した論理にもとづいて現実を批判する，能力を示していたからである[16]。

しかも，戦前のような厳しい言論規制はなくなった。それなのに日本人の言葉が依然としてこのような水準に止まっているのは何故か。ウォルフレンはこれを，知識人達に体制を批判する勇気がないからだと言って彼らを激怒させた。筆者もこれには賛成はできないが，日本では言論が現実世界をリードできず，破局という現実が生じて初めてその論評が行われるようになることは事実である[17]。これまでに見てきたことを総合すると，この現象は次のように説明できるであろう。

日本では，人々が所属集団の現実について抗議したり意見を述べたりすることは，「言挙げ」として厳しく禁じられている上に，彼らの考えや内部の事実に関する情報も殆ど外に漏れてこない。西欧では知識人の主な仕事は，そのような材料を一貫した論理に従って組み立てて現実を評価することだと考えられているが，日本ではそれには元々材料が不足している。

しかも長い間学問の輸入国だったことの結果として，この仕事の道具に過ぎない抽象的な概念や理論を考えたり教えたりするのが知識人の仕事だという考えが依然として強いので，学者と言われるような人達は，益々現実から「遊離」して行く。

また近年，より現実的な問題を取り扱おうとするアウトサイダー的な知識人が外国人を含めて激増しているが，今の日本では，そのエネルギーは洪水のように浪費されるだけである。彼らの中には，実態に関する多少の知識と公表された資料を簡単な論理にもとづいて組み立てるだけで，現実に衝撃を与え得る言挙げをする者がいる。「田中角栄の金脈研究」「ザ・ハウス・オブ・ノムラ」などはその典型だが，日本のアカデミズムとジャーナリズムはそれをフォローしなかった。

田中角栄が倒れたのは，金脈論文によってではなく外国人記者クラブがそれを取り上げたためだったし，野村の社長と会長が辞職したのは，「ノムラ」が出版されたからではなく，国税庁という「現実」が動いたためだった。日本の現実世界が外国のジャーナリズムに神経質なのは，それが彼らの現実世界を動かすことを知っているからである。アウトサイダーが爆発させたダイナマイトが地滑り現象を引き起こすには，言葉の世界全体がそれに共鳴することが必要だが，今の日本にはその条件はない。この世界が，「言挙げ」の独占権を失うことを恐れて現実と関わろうとしない部分と，現実に働きかける内に委託費，広告料，情報などを貰う「義理」に絡まれて自由を失ってしまう部分とに分裂しているからである。

共産主義体制の失敗は，権力がマルクス・レーニン主義の論理に従って現実を支配しようとしたところにあった。今の日本の体制の問題は，権力が，テクノロジーにリードされる現実世界の野放図な発展を制御できる論理を持てないところにある。これはある意味では，共産主義以上に，世界にとっても日本にとっても危険である。ソ連のペレストロイカは，イデオロギーという論理の呪縛から現実世界を解放しようとするものだったが，日本のそれは，「言霊」の呪縛から論理を解放することでなければならない。

注

(1) リビジョニスト（日本異質論者）と言われる人達にはこの傾向が強い。

(2) その典型はルース・ベネディクトであろう。Benedict, Ruth. “The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture”, Boston, Houghton Mifflin 1946. 日本語訳「菊と刀」，社会思想社，昭和48年版

(3) 中根千枝「タテ社会の人間関係」講談社，昭和49年版

(4) 土居健郎「甘えの構造」弘文堂，平成３年版

(5) カレル・V・ウォルフレンが米誌「フォーリン・アフェアーズ」1987年冬季号の論文題名として使った「ジャパン・プロブレム」という言葉が最初だと思われる。日本語訳は「諸君」1987年４月号

(6) van Wolferen, Karel. "The Enigma of Japanese Power ; People and Politics in a Stateless Nation", London : Macmillan, 1989. 日本語訳「日本／権力構造の謎」，早川書房，平成２年版

(7) 同上，下巻68頁

(8) Dale, Peter N. "The Myth of Japanese Uniqueness", London - Sydney : Croom Helm and NISSAN INSTITUTE FOR JAPANESE STUDIES, University of Oxford, 1986. pp 85～86. ここで Dale が主に引用しているのは，R. A. Miller, "The 'Spirit' of the Japanese Language" in Journal of Japanese Studies, 3 ： 2 (Summer 1977) である。

(9) 井沢元彦「言霊（ことだま)」，祥伝社，平成３年

(10) 同上，本書に挙げられている例は，非常に多岐に渡るだけでなく，万葉の時代から現代にまで及んでいる点で，日本の文化と政治を一貫して見られる利点が大きい。

(11) Bell, Daniel. "The Cultural Contradictions of Capitalism", New York : Basic Books, 1976. 日本語訳「資本主義の文化的矛盾」講談社学術文庫，昭和51年版

(12) Berque, Augustin. "Vivre l' espace au Japon", Paris : Presses Universitaires de France, 1982. 日本語訳「空間の日本文化」筑摩書房，昭和60年版．151～153頁

(13) 小金芳弘「日本の伝統的論理こそ経済摩擦の根源」エコノミスト，昭和62年５月26日号および「市場開放へ向けてのシナリオ」中央公論，昭和62年７月号

(14) ルース・ベネディクトは，日本人が自殺のテーマを「由々しき事件」flagrant case として愛好することを語り，また日本人の「徳のジレンマ」について第10章全部を費やして検討したが，結局は，「矛盾が深く彼らの人生観の中に根を下ろしている」と言うことしかできなかった。前掲書192頁および224～262頁参照

(15) ベルク，前掲書35～36頁

(16) 丸山真男「日本政治思想史」東京大学出版会，1983年版。本書は，徳川時代の日本にも政治思想の弁証法的発展が起こり始めていたことを示唆している。

(17) カレル・V・ウォルフレン「なぜ日本の知識人はひたすら権力に追従するのか」中央公論，平成元年１月号。これに対する日本側からの反論は同誌３月号，西欧側からの再反論は同誌８月号に掲載されている。私はこの時は，主たる原因は彼らの置かれている社会的状況，特にその活動の場である大学，学界，ジャーナリズムなどの閉鎖性にあると考えた。小金芳弘「黒船としての〈日本知識人批判〉」中央公論，平成元年12月号。